

旅をしながら考えてきたこと

私が制作者として旅公演を手がけるようになってから、9年になろうとしています。きっかけは自分が専任制作として今も関わる、三角フラスコというカンパニーです。1999年の3月、三角フラスコは初めての旅公演を行いました。それから、(まあまあ)わりと長い時間が経ちました。これまで私は、三角フラスコとともに旅をしてきました。弘前・盛岡・福島といった東北近県、そして東京・大阪。特に大阪ではこの9年間に6作品を上演しています。その過程は試行錯誤の繰り返しでした。ひとつひとつの公演において、その時々、考えていたことは、わりとバラバラだったように思います。それでも、それぞれの公演に向き合い、失敗を繰り返しながら、少しずつ何かを得てきました。バラバラに考えていたことから得てきたもの。その成果が時に、期せずしてつながっていく。そんなやり方で私はこれまで自分のペースで思いついたことを形にするという作業を淡々と続けてきました。

とは言え、2006年から2007年にかけては、大きく価値観や目線が変化したシーズンでした。具体的にはこれまで何年もかけてちょつとずつ準備してきたことが、続々実行されたということなのですが、それが単なる思いつきの実行を超えて、例えるなら扱う手つきがそれまでとは変化してきているように感じています。2006年の6月にPmP2006に参加したことが、単純にネットワークが生まれたことというだけでなく、私自身の視野をぐいっと広げたとも言えると思うのです。

金銭的なリスクを超える成果

このシーズンの中で最も新しいことにチャレンジしたと言えるのがoffice-over.『ウエストバージニア州立大学最期の学内放送』tour2006-2007です。それまで劇団の専任制作を主としてきた私にとって、全く新しい作品を一からプロデュースするというプロジェクトは、本当にエキサイティングな経験でした。クライアントであり、なおかつ一人芝居であるこの作品の出演者でもある菅原みちやと何度も打ち合わせを重ねながら、劇作家を決め、演出家を決め、スタッフを固めていきました。そしてその作品をいったいどこで上演するのかという話し合いの中で、この西日本ツアーは自然に形になって行きました。仙台でのワークインプログレス上演を経て、大阪の一人芝居フェスティバルで初演する。そこまで決まった時点で私たちはそこで製作した作品を持ち歩く場所を探し始めました。そのときにPmP2006で培ったネットワークは武器になりました。フェスティバルに参加することを最終目標にするのではなく、そこからつなげて単独公演を行おう。そういう経緯で私たちは福岡・広島での上演を決めたのです。そもそも菅原はポータブルに上演できる作品を当初から望んでいました。ならばこのプロジェクトにおいて、旅公演はある意味必須だったのです。仙台で公演をすることはいつでも出来る。それならば今、出来る場所で上演することにチャレンジしよう。実際のところ、大阪・福岡・広島での上演における経済的なリスクは大きいものでした。それでもこの作品を各地の観客に届けられたことは、金銭的なリスクを超える成果がありました。

from
仙台

旅公演は人を集団を作品を、確実に変えます



office-over.『ウエストバージニア州立大学最期の学内放送』

その成果のうちの一つとして挙げられるのが、最初の上演、一人芝居フェスティバル「INDEPENDENT:06」でハンマーブロスの『レボリューション革命』という作品に出会ったことです。大阪に飛び込んで参加したフェスティバル。その旅公演がまた、新たな始まりとなったのです。その出会いは2007年秋のトライポッド・セレクション「be connected」に、まさに「つながって」いきます。「be connected」という企画はそもそも、『ウエストバージニア州立大学最期の学内放送』の製作とほぼ同時に立ち上がりました。この一人芝居の脚本を手がけた大信ベリカンが率いるカンパニー満塁鳥王一座、そして演出を担当した生田恵の三角フラスコが、office-over.の作品を軸にして連続上演を東京で行う。その企画に新たな出会いからハンマーブロスに加わり、それは「be connected」の大きな命題でもあった地域と地域が、ダイレクトにつながる、という色合いをより鮮明にしてくれました。

作品を移動させると言うこと

旅公演＝地域を越えることのメリットについて、私はいつもいくつかの理由を考えています。もちろん新たな場所で新たな観客に出会うこと、それは純然たる動機としてそこにあります。しかしそれだけの、単純なものではないと思うのです。私が今、ひとつ着目している点は、作品を移動させると言うことは、何人ものクリエイターを一度に移動させるということだということです。ひとつの作品を他地域で上演するとき、企画の規模によっては10人単位でチームができあがります。作家・演出家・俳優はもちろん、スタッフまで含めた複数のクリエイターが、ホームではない場所で作品を上演しようとするのです。そのことは必ず何かしらそれぞれに影響を与えるように思うのです。

アウェイの空間においても自分たちの職能分野を全うし、自分たちの表現を成立させようとする。その過程でそれぞれが得る成果を、私は非常に大きなものと感じます。それは決して劇的な変化では

ないかもしれません。そもそも、早急に答えを求められるものではないでしょう。しかし旅公演は人を集団を作品を、確実に変えます。ほんのちよつとでも、なにか、変わります。それが私が地域を越えていく一つの理由だと思っています。



満塁鳥王一座「blind」

トライポッド・セレクション「be connected」
(東京公演)
2007.10.12[金]-21[日] こまばアゴラ劇場
満塁鳥王一座「blind」
office-over.『ウエストバージニア州立大学最期の学内放送』+
ハンマーブロス「レボリューション革命」
三角フラスコ「星屑とボタン」
*トライポッドが仙台だけでなく、満塁鳥王一座(福島)、ハンマーブロス(大阪)と組んだ東京10日間公演を実現。地域発の企画が多いこまばアゴラ劇場としても画期的だった。

トライポッド
1995年4月、仙台を拠点とする劇団、三角フラスコの制作部として発足。2005年7月に独立。引き続き、三角フラスコの運営と公演の企画・制作を手がけるとともに、他地域を拠点とする劇団が行う仙台公演への制作面での協力、俳優のスキルアップを目的としたワークショップ開催など、幅広く活動中。



三角フラスコ「星屑とボタン」

なにもかもが、つながっていく

森 忠治 演劇プロデューサー